

善導の著作と龍門阿弥陀造像記

『觀經疏』十四行偈石刻の新発見

倉 本 尚 徳

はじめに

善導の著作は日本の浄土教の基盤のひとつであり、これまで史学・教理学ともに膨大な先行研究が存在する。既存の善導の著作や伝記については資料が既に出揃っている感があり、地域社会との関係という面では、研究を進展させるのは困難な状況である。

そうした現状を打開するため、筆者は現在、仏像に刻まれた造像記を主な資料として、その社会的影響力を考察することができないのではないかと考えている。今回、手始めに唐代造像銘の宝庫である龍門石窟という場を対象を限定して調査し、銘文内容と善導の著作との比較を中心として考察する。

現在では、龍門石窟奉先寺盧舎那大仏造営の検校僧に勅命により任命された「西京實際寺善道禪師」が浄土教の祖師善導を指すことが定説となっている。また、龍門石窟においては、北魏時代釈迦・弥勒像が中心であったのに対して、唐代

になると阿弥陀像が最も多くなるとも周知の通りである。塚本善隆氏はこの現象を「北魏中原のかくの如き漠然たる浄土信仰が、齊隋から唐の盛期に至る間に、阿弥陀仏の西方浄土を専念要求する浄土教によって、教化せられてしまったことを、明らかに物語っている」と総括する⁽¹⁾。その他の先行研究においても、浄土堂などの窟は善導浄土教の流行を背景としていることが指摘される⁽²⁾。

にもかかわらず、善導自身あるいは善導浄土教の信奉者が龍門石窟の阿弥陀造像や浄土造像に関与したことを直接的に示す事例はこれまで発見されていない。本稿においては、善導の著作の内容と造像記の内容の比較検討によって、善導浄土教信奉者による銘文であることがほぼ確実である事例を新たに紹介し、その内容を検討してみたい。

A 第一〇三八窟（趙客師洞）顯慶五年（六六〇）造阿弥陀像記（彙録1427、龍拓5.144、京 tou326X、傳図09312、23121。

書名略号については本稿末尾参照。）

この造像記は、窟高二八〇、幅三〇九、奥行四〇八厘の趙客師洞南壁に存在する。趙客師の名は別の造像記に「於趙客師龕内敬造」と見える。清明寺洞（五五七窟）には上元二年（六七五）の紀年造像記に「雍州人趙客師、王安尚……（以下人名）」（彙録七四七）とあり、雍州出身者による窟であることがわかる。趙客師洞の唐代紀年銘全八件のうち、顯慶五年（六六〇）のものが五件を占め、のこりの三件のうち二件も顯慶年間（六五六―六六一）であることが確実である。尊格は題記に拠れば、大龕がみな阿弥陀仏で、小龕は観音か阿弥陀である。これ以外に北壁に優填王像が存在する。

このうち特に重視すべきは南壁の大龕に付された顯慶五年造像記（彙録一四二七）である。文の前半部には、「□徽五年以来、一□時一切処、礼阿弥陁□、念阿弥陁仏、觀阿弥陁仏……根悉皆迴願往生□捨□財□□□陁石像一……造憂□王像一軀」とある。「□□陁」は「阿弥陁」であり、「憂□王像」はこの窟北壁の無銘の優填王像のことであろう。阿弥陀仏を「礼・念・觀」とするということ意味と「□根悉皆迴願往生」とをともに含むのは、善導『往生礼讃』「問曰。今欲勸人往生者、未知、若為安心・起行・作業、定得往生彼国土也。答曰。必欲生彼国土者、如『觀經』說者、具三心必得往生。何等為三。一者至誠心。所謂身業礼拝彼仏、口業讚歎稱揚彼仏、意業專念觀察彼仏。凡起三業、必須真實。故名至誠心。二者深心。

（中略）。三者回向發願心。所作一切善根悉皆迴願往生、故名回向發願心。具此三心、必得生也。」（大正四七・四三八下）であろう。つまり、この造像記は善導の思想の核心であるいわゆる三心釈をふまえたものであると考えられる。特に「（所作一切善）根悉皆迴願往生」という語は、この時代まで『往生礼讃』にのみ見られる語であり、この造像記が善導浄土教の信奉者によるものであることはほぼ確実であると考えられる。この造像記から、顯慶五年には『往生礼讃』がすでに成立していた可能性が高いとも言えよう。

銘文によれば、永徽五年（六五四）以来、阿弥陀仏の唱名・礼拝・觀想を實踐しており、あらゆる功德を浄土往生に廻向し、財を喜捨して阿弥陀仏を造像したことがわかる。阿弥陀仏以外にも優填王像なども造っている。優填王像はこの窟の反対側の壁（北壁）の像を指す可能性が高い。実践面では、阿弥陀仏の称名や『阿弥陀經』の誦誦を中核とし、「終日無闕」であることが強調されている。また、文末には「有信士存意習焉」とあり、善導浄土教に基づく実践を他人に勧めるものであり、造像銘文としては異例である。

以上の考察により、この顯慶五年（六六〇）の造像銘が、永徽五年（六五四）以来、善導の浄土教に基づき実践してきた信奉者によるものであることが明らかにになったと思われるが、だとすれば、この趙客師洞の同じ顯慶五年銘を有する正

壁や北壁の阿弥陀造像も善導浄土教の信奉者による勧誘などがあった造られた可能性が高いと言えるだろう。

B 一四九七龕上元二年（六七五）宣義郎周遠志等造阿弥

陀像記（彙録2537、龍録813、久野87:476、龍拓64）

善導が勅命により龍門石窟のシンボルとも言える奉先寺盧舍那大仏造営の検校僧に任せられたことは夙に有名である。咸亨三年（六七二）武后が化粧料二万貫を喜捨し、上元二年（六七五）十二月三十日に完成した。この盧舍那大仏と同月に完成した、奉先寺大仏周辺の善導浄土教信奉者によると考えられる造像が一四九七龕である。

一四九七龕は盧舍那大仏の南側、古陽洞の上方、北市絲行像龕のすぐ北側に位置する。龕高一五九、幅九三、奥行一五七糎である。像は現存しないが八角形の窪みが三箇所壇上にのこる。正壁の壇には蓮華化生などの浮彫が存在する。久野美樹氏は「本龕像には本迹思想と、諸仏の中から阿弥陀信仰を選んだ造像主の信仰態度が看取できる」と指摘する。さらに踏み込んで言えば、以下で見るように『阿弥陀経』を刻み、浄土に關係のある語を使用しており、おそらく善導自身あるいはその弟子の指導の下、造られた龕と考えられる。

この龕の左壁に『阿弥陀経』を刻むが、『阿弥陀経』は周知のとおり善導が数万巻書写し、なおかつ読誦を勧めたという経である。銘文中には一般的造像記には見られない浄土教

關係の特殊な語が多く用いられている。「十念」「六八之言」「結願於西方」などは西方浄土信仰と關係の深い語であり、なおかつ造像銘としては非常に珍しい語である。次に述べる一〇七四窟同様、「天后」のため祈願したことを龍門石窟では最初に表明し、盧舍那大像と同年月に完成している。善導自身、あるいはその弟子による指導があったと考えられる。

C 一〇七四窟慧審造像銘（彙録1490、久野156:497）

第一〇七四窟は、窟内に像が全く残っていないにもかかわらず、善導浄土教を信奉する僧が龍門石窟の浄土造像に直接的に関わっていたことを示す極めて注目すべき窟である。この窟は久野氏によつて初めて本格的に研究対象としてとりあげられたが、善導との關係には言及されていない。

最初に窟の概要を説明しよう。窟の位置は趙客師洞と盧舍那大仏を結ぶ線のほぼ中間にあたり、かなりの高所にある。窟の大きさは、窟高一八八、幅二〇〇、奥行二三五糎である。天井には三重の蓮弁が浮彫されている。窟中程の床面には小さな八角形の穴が十一箇所存在する。久野氏はこれについて、浄土を表現したことが確実な高平郡王洞の床面との類似性を指摘し、元来、蓮華座がはめこまれ、床面を宝池に見立てたものと推測する。また、正壁中央部に高さ九〇、幅九五、奥行七一糎の方形の穴があるが、元来、遺灰などを安置したものと久野氏は推測する。ただし、銘文には「還來此

また、左右および奥壁に沿って、床面に大きめの円形または八角形のくぼみが九箇所存在する。これは、おそらく三方にそれぞれ一仏二菩薩像をつくったものであろう。久野氏は、銘文中に「帰命三仏菩提尊」「釈迦仏」「阿弥陁」「弥□□」とあることなどから、この三仏は釈迦、弥勒、阿弥陁であったと推測する。しかし、「三仏菩提尊」などの語は、銘文が引用する『観経疏』の文章そのものであり、像を指した語ではない。則天武后期造営の北市綵帛行浄土堂には、三方の壁面にそれぞれ仏像がもと存在し、これが銘文に「阿弥陁仏像三鋪」とあるのに対応すると考えられる。つまり、阿弥陁仏を各壁に造っていたのである。このことと、一〇七四窟も西方浄土を表現していると考えられることを勘案すれば、この窟も三方に阿弥陁仏像を造ったと考えた方がよいのではないか。さらに、この窟には、窟外の入口上部に造像記が存在する。その内容は極めて注目すべきものである。筆者は実地調査、龍門石窟研究院所蔵拓本の調査、さらに典拠仏典の調査の結果を総合して独自に録文を以下の通り作成した。なおこの龕の年代については、「天后」という語が見え、かつ則天文字を使用していないところから、六七四〜六八三年の可

NII-Electronic Library Service

仏教石刻で経論以外の注疏に属するものを刻するのはこれが最古の事例であろう。『観経疏』巻四には「此義已請証定竟、一句一字不可加減。欲写者一如经法。应知」（大正三七・二七八下）とあるが、いかに善導の文章がその信者に尊崇されていたかをこの銘文は示している。②の部分は、欠損が多く詳細は不明であるが、①の願によって阿弥陀浄土に往生し、一万年後の法滅尽の際にはこの世に戻り経蔵を開くという意味であると解釈できよう。③は対応する典拠である曇鸞『浄土論註』から推測すると、もしひとたび安楽浄土に生まれたならば、衆生を教化するため三界に生まれかわることを願い、浄土での命を捨てて、願い通り三界に生まれかわっても、阿弥陀仏の善住持によって、無上菩提種子が畢竟不朽であることを述べたものである。①②③の部分あわせて往相廻向・還相廻向を示していると考えられる。④は、造像の功德を、（天皇）、天后や皇太子、先祖、師僧父母へと廻向したものであると考えられる。⑤も欠損部分が極めて多いが、「経讃」として、善導『往生礼讃』を引用している。

D 一三八七窟（薬方洞）「究竟莊嚴安樂浄土成仏銘記」（彙録 1754、久野 171:503）

薬方洞の窟門外上方の碑形の区画（碑高約二・五米）に刻まれるのが永隆二年（六八二）四月二十日「究竟莊嚴安樂浄土成仏銘記」である。この日付が善導入寂の年月とされる同年

三月の約一箇月後であることも偶然かもしれないが注意しておきたい。この銘文については、久野氏は『彙録』の録文をほぼそのまま提示し、「阿弥陀信仰を意識したもの」と述べる。一方、王振国氏は、より詳細に分析を加え、銘文の首尾各一、二行を除いて、基本的に曇無讖訳『悲華経』諸菩薩受記品第四之一を典拠としていると指摘するが、第一行を「沙門□慧般□代輪超□□超□□乘□□比丘□□未……」と読み、この銘記の意義については不十分な理解に留まる⁽⁴⁾。

筆者が傳斯年図書館所蔵の二種のこの銘記の拓本を調査したところ、『悲華経』以外にも『観世音菩薩授記経』を用いており、また沙門名も「慧般」ではなく、一〇七四窟造像記に見える「慧審」であり、単なる經典の抄録ではなく、極めて興味深い内容であることが判明した。詳細な検討は稿を改めて行うことにする。

おわりに

以上いくつかの造像記について、善導浄土教の信奉者によるものであることを新たに明らかにした。特に今回提示したA、C、Dの銘文はそのままでは史料として使用できない程、従来の録文に判読されていない文字や誤りがあり、実地調査や拓本を用いた文字の校訂という作業が不可欠である。

造像銘としては特殊な形態をとるAとCに共通するのは、

他者を勧化する文を有していることである。Aの銘文は、善導浄土教の盛行が西暦六五〇～六〇年代の龍門石窟における阿弥陀像の多さの一因となっていることを直接示す事例であった。善導が龍門石窟の造像活動においてすでにかなりの影響力を発揮していたと考えられることも、盧舍那大仏の検校僧に選ばれた一因ではないだろうか。Bは善導が検校僧に任命された盧舍那大仏の落慶と同年月のものであり、この窟には『阿弥陀經』も刻まれている。造形面においても化生童子の浮彫が本尊（佚失）の壇に刻まれるなど新しい変化が見える。Cは、自身を主体として善導の『觀經疏』十四行偈を用い、また、末尾には経讚として善導『往生礼讚』が用いられる。さらに、一万年後の法滅尽の後この世界に戻り経蔵を開くという願が述べられ、また、曇鸞『浄土論註』も用い、往相・還相廻向と思われる思想が示されており誠に興味深い。一〇七四窟は造形面においても、窟龕全体を西方浄土とみなし造形された痕跡があり、則天期の「北市綵帛行浄土堂」の前身にあたるものとみなすことができる。今回新たに提示した銘文は、思想的にも非常に興味深い内容を含んでいる。しかし本稿では紙幅の関係で概要を示すにとどめた。全体の録文とより詳細な検討は別稿を期したい。

1 塚本善隆「龍門石窟に現れたる北魏仏教」『塚本善隆著作集』

善導の著作と龍門阿弥陀造像記（倉本）

第二巻、大東出版社、一九七四年、四五八頁。 2 曾布川寛『中国美術の図像と様式』中央公論美術出版、二〇〇六年、三八八、四一〇頁など。 3 拙稿「龍門北朝隋唐造像銘に見る浄土信仰の変容」『東アジア仏教学術論集——中・日・韓国際仏教学術大会論文集』二、二〇一四年。 4 王振国『龍門石窟与洛陽仏教文化』中州古籍出版社、二〇〇六年、九四頁。

〈書名略号〉

彙録：劉景龍・李玉昆主編『龍門石窟碑刻題記彙録』中国大百科全書出版社、一九九八年。

龍録：「龍門石刻録録文」（水野清一・長広敏雄『龍門石窟の研究』座右宝刊行会、一九四一年）。

久野：久野美樹『唐代龍門石窟の研究』中央公論美術出版、二〇一一年。

龍拓：「北京図書館蔵龍門石窟造像題記拓本全編」広西師範大学出版社、二〇〇〇年。

傳図：中央研究院傅斯年図書館蔵拓本。

京：京都大学人文科学研究所所蔵石刻拓本資料（ウェブサイト <http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-machine/imgsrv/takuhon/>）管理番号。

〈キーワード〉 龍門石窟、造像銘、阿弥陀仏、善導、『觀經疏』、

『往生礼讚』

（中央研究院歴史語言研究所助研究員・博士（文学））